

# アラブなりわいプロジェクトにおける知の跳躍

研究高度化支援センター

熊澤 輝一



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 総合地球環境学研究所  
Inter-University Research Institute Corporation, National Institutes for the Humanities  
Research Institute for Humanity and Nature

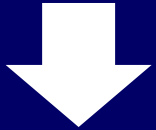
# アラブなりわいプロジェクト

- **名称:**「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究ーポスト石油時代に向けて」
- **目的:**西アジア・北アフリカの乾燥地域において、1000年以上にわたり生き残り続けることができた、アラブ社会の生命維持機構と自給自足的な生産活動の特質を明らかにし、ポスト石油時代に向けた、地域住民の生活基盤を再構築するための学術的枠組みを提示すること

# 経緯

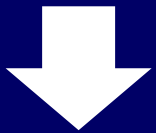
IS

2006年度



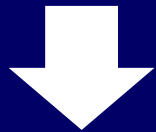
FS

2007年度



PR

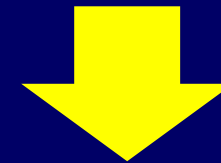
2008年度



FR

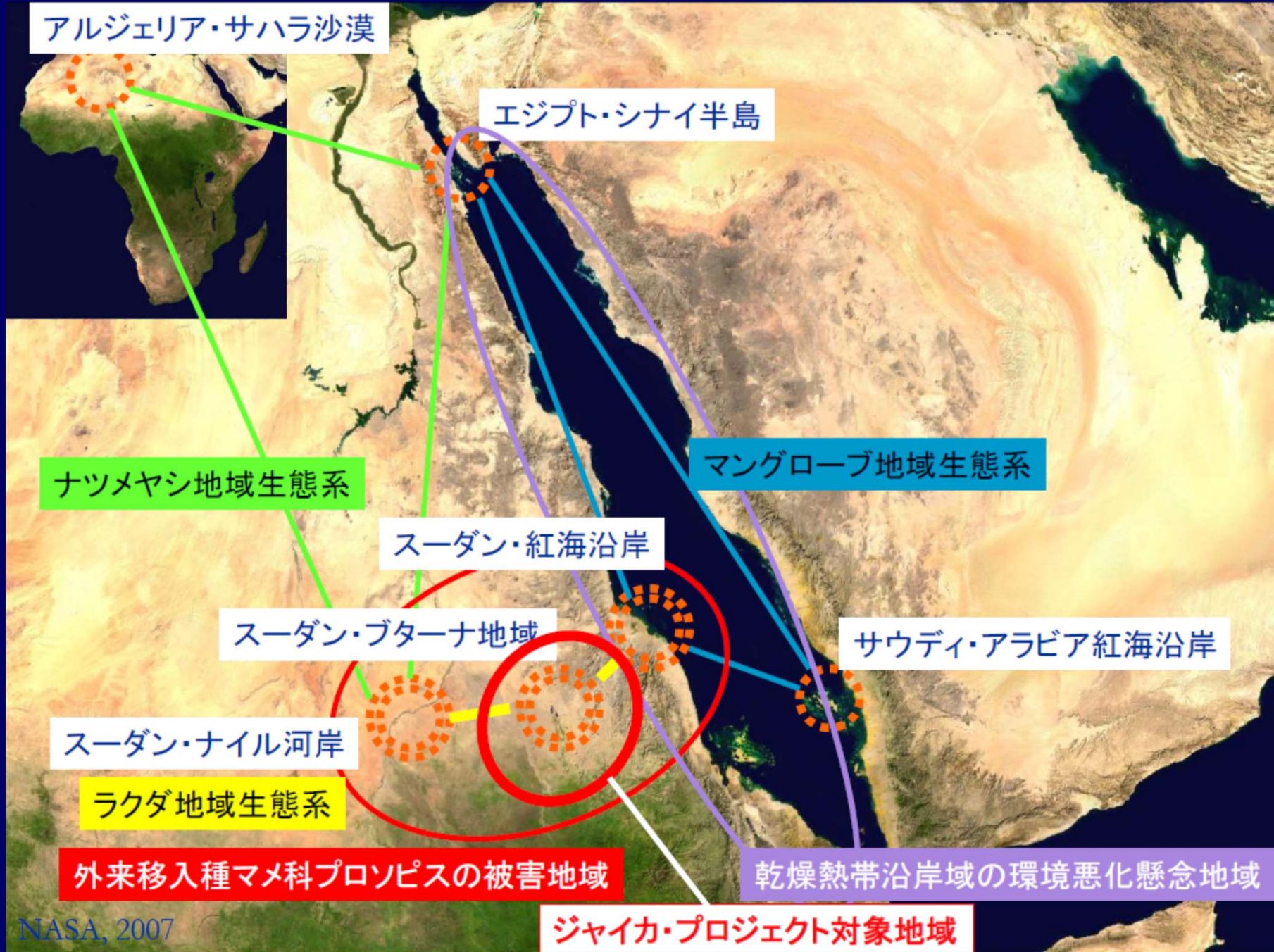
2009  
—2013年度

「アラブ社会における  
サブシステム生態系の研究  
—生活基盤回復のために」



「アラブ社会における  
なりわい生態系の研究  
—ポスト石油時代に向けて」

# 調査対象地域



# 体制

- プロジェクトリーダー：縄田浩志

(2013年9月30日転出⇒窪田順平・代行)

## 4グループで構成

- 「外来移入種の統合的グループ」
- 「乾燥熱帯沿岸域の環境影響評価グループ」
- 「研究資源共有化グループ」
- 「地域生態系比較グループ」

これまでにプロジェクトに関わったメンバーは、143名。





# プロジェクトの成果①ー出版物



日本語 アラビア語、英語、フランス語、スワヒリ語  
による出版

# プロジェクトの成果②ー展示



## 企画展「砂漠を生き抜くー人間・動物・植物の知恵」

- 場所：国立科学博物館
- 期間：2013年 11月23日（土）  
～ 2014年 2月9日（日）
- 11万人以上の来場者







どこで知の跳躍が起こったか



# インタビューの実施



縄田浩志さん (秋田大学国際資源学部・教授)

1回目：2015年10月9日 於 地球研

2回目：2015年12月3日 於 地球研



中村 亮さん  
(福井県里山里海湖研究所・研究員)

2016年1月27日

於 福井県立三方青年の家

共同研究者・コアメンバー



坂田 隆さん  
(石巻専修大学・学長)

2016年12月11日

於 地球研

PR-FR5まで6年間  
プロジェクト研究員として  
地球研に在籍



石山 俊さん  
(地球研・砂漠化プロジェクト研究員)

2016年2月17日 於 地球研

聞き手：菊地直樹、熊澤輝一、近藤康久、安富奈津子、鎌谷かおる

# アラブなりわいプロジェクトで 起こった知の跳躍

1. プロジェクト前半は全く進まずにいた、キーストーン種であるジュゴンの調査・研究が、後半になって一気に進み、プロジェクトの中心的な成果となった点。
2. 文化人類学の研究者と動物行動学の研究者による共同調査を通して起こった知の跳躍

# ジュゴンの調査・研究が進むようになった経緯

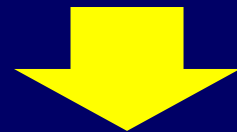
- スーダンにおける現地調査体制の整備
- 市川光太郎・プロジェクト研究員の着任





# スーダンにおける 現地調査体制の整備

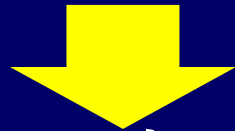
- 当初は、サウジアラビアをメインの調査地として計画したが、進まず。



- スーダンの方でのアレンジが進み、紅海大学 (Red Sea University) のサポートを受けられる体制に。  
(2011年: 紅海大学と地球研との間で研究協力の覚書が締結)

# 市川光太郎さんの着任

- FR2の2010年10月に、市川光太郎さんが地球研のプロジェクト研究員として着任。
  - ジュゴンの鳴き声を用いた行動生態の研究をしている方
  - ⇒ ジュゴン研究を専門とする担い手を得た。



- 以降、研究が具体的に進むとともに、バイオリギング等の技術開発がプロジェクトの主要な成果として取り上げられるようになる。

「ジュゴンが一番遅れてたんですけど、市川さんが来てくれたことによって、当初からキーストーン種を縄田プロジェクト挙げてて、ジュゴンだけが調査できてなかったんですね。これでジュゴンも調査できた。最初に挙げたこの五つのキーストーン種に、満遍なくアプローチできたという意味では、最後のピースを埋めたということでは転機というのか、だったのではないかなと思います。」(中村さん)



# 文化人類学と動物行動学との融合によって 起こった知の跳躍

「別にジュゴンが希少であろうが何であろうが、漁師が生きていくためには捕って食べてもいいんじゃないか」

中村さん

市川さん

ジュゴン、希少動物をどういうふうに守ればいいのか。

スーダンの沿岸部の漁村に滞在して、  
共同調査を開始

「動物行動学の研究者と、文化人類学の研究者が同じところで調査をして、その地域の生活改善のためにはどうしたらいい？というのを考え始めた。」(中村さん)

新たな問いの設定  
「第一の跳躍」

地域の漁撈文化があるのか。漁場の分布、魚種、漁法や漁具の使い分け、獲り方を調査

ジュゴンの行動パターンを調査・解析

調査の結果、ジュゴンがかかるのは刺し網だけであることがわかった。  
⇒そこがジュゴンの行動範囲であることがわかれば、ここでの刺し網の使用について配慮するよう提案することができる。

両方の結果を踏まえた新たな知見・提言  
「第二の跳躍」







# 知の跳躍の要因

# プロジェクトリーダーの バックグラウンド、経歴

- 早稲田大学高等学院の出身
  - 高校の時分に関心分野の研究と研究者に触れる。
  - 体育会系運動部で体力と組織行動を身につけた。
- 18歳にして考古学、建築学、歴史学、言語学、民族音楽学、保存修復などの様々な研究者が参画する調査へ
  - 現場での異分野融合を目の当たりにする。
  - 異文化ショックを経験することになった。
- 大学院は、まずスーダンに留学。現地のコーディネーター的な働きも
  - 発掘調査の許可やアレンジなどのために、大臣レベルの人や現場の砂漠の人々との交渉、そのためのロジスティックを準備といったことを、20代前半から半ばで実施。

縄田さん個人に当時起こった、知の跳躍の契機  
⇒現場を共有することへの強い意識を形成する基盤

失敗の経験の積み重ね「今考えると、自分の20代の経験ってのは、ほとんどは失敗っていうか(笑)、たくさんの苦しい思い出ですね、やっぱり。たくさんの失態をしています(笑)。交渉うまくいかなかったり、けんかしたり、そういうのも含めて、だけど経験にはなってるので、やっぱりこういう時はこう言っちゃいけないな、こういうやり方しっちゃいけないなって」(縄田さん)



# リーダーシップのあり方

## 今回のインタビューの最大の特徴

- 縄田さんがリーダーとして地球研内のプロジェクト研究員、地球研外の共同研究者(コアメンバー)から高い評価を受けている点

なぜ縄田さんはリーダーとして  
評価されたのか？



# (1) 段取りをつけるリーダー

- アラブなりわいプロジェクトの基本方針は、リーダーは全地域に行ってプロジェクトのアレンジをし、研究員は担当のテーマ、地域を重なりを持ちつつ分担。
- 現場のアレンジに力を注いだ。
  - 「文理融合的な知の融合的なものは、僕自身、現場で起こる。だから現場のアレンジなり雰囲気はどう形作れるかが、何といっても一番の要」(縄田さん)
  - 「一つの大きなまさにプロジェクトとして現場を運営せざるを得ないという、そこに最初から僕は飛び込むことができた。だから現場では融合を目指すことは、それが自分の特色であり、ある意味限界でもあると思うんですね。」(縄田さん)
- 現場志向を基礎に、アレンジの部分の責任と苦労を背負った理由
  - ①アレンジにより全体が動くということ
  - ②個々の研究者がスムーズに自分の目的に沿って現地調査をできるようにすること
  - ③違う世代の人、違う分野の人、現地の人々が合同でやることを目指した。

全体の動きをマネジメントしつつ、自らがこれに注力することで、メンバー自身の目的に沿った調査と異なる分野・立場の人々の融合の実現性を確保。



## (2) いないリーダー

- 「まず、縄田さんが日本にいなかったですね(笑)。PL会議でしたっけ。あれは、僕とか石山さんが頻繁に出てましたね」(中村さん)
  - 「自由でしたね。」(中村さん)

縄田さんは、成果のとりまとめに注力したFR5を除いては、基本的に地球研を留守にすることが多かったリーダーである。

# (3) つるまないリーダー

- 研究員ら研究室スタッフとは反対側のスペースに机を置いていた。
  - ⇒ 本を置くスペースを確保するとともに、管理者とはいえ自分も見られることに抵抗があったようである。
- 縄田さんは、プロジェクト研究室のメンバーと、5年間のうち何度かしか一緒にお昼食べたことない。
  - 「自分はそれにやるにはふさわしくないというか、お昼いなかったり、あの人がいつ来るの？みたいなときが正直多かったので、その責任は担えないと、自分でわかってたんで、お昼は僕別に、プロジェクト全体の流れと私は関係ありませんっていう姿勢を貫いて」  
(縄田さん)



# プロジェクトの仮説 想定されたゴール

- (1) 幅広の定義を状況に合わせて運用する
- (2) 重要な概念は最後まで変えなかった

# (1) 幅広の定義を状況に合わせて運用するー「アラブ」の定義の場合

- アラブなりわいプロにおける「アラブ」  
ー「アラビア語を話す人々」
- 宗教や民族ではなく、言語を対象にした。このことは、中村さんのタンザニア沿岸部の研究も「アラブ」として調査対象として認めるロジックにもなった。
  - ー 「アラビア語をしゃべる人たちっていうのであれば、タンザニアの沿岸部もアラビア語を解する人たちです。縄田さんもそれを認めてくれたんです。なので、6年間で20回ほど現地調査に行ったんですけど、タンザニアやケニアなど、縄田プロジェクトのメインの調査地とはずれたところでの調査もかなり認めてくれましたね。...(中略)...縄田プロジェクトはちょっと変なプロジェクトだったと思います。」と述べている。」(中村さん)

このように、元々幅広く対象をカバーし得た、言葉の定義を状況に合わせて運用することで、研究員のフィールドや専門性を研究プロジェクトに組み入れることができたと考える。



## (2) 鍵概念名と重要な調査対象は最後まで変えなかった

- 着眼点:「キーストーン」「エコトーン」「伝統的知識」
- キーストーン:ラクダ、ナツメヤシ、ジュゴン、マングローブ、サンゴ礁 (アレンジの状況により若干の出入りはあったが)
- エコトーン:涸れ谷のほとり、川のほとり、山のほとり、海のほとり
  - 「本当に変えないで最後までやりました。...(中略)...批判的なコメントとかもたくさんありましたけれども、そこはこういう意味合いだとかいういろんなかたちの説明をしつつ、なくしたり、変に加えたりはせずに、そこは最後まで維持した。」(縄田さん)

鍵概念名と調査対象を変えて、鍵概念名と調査対象そのものの妥当性についての議論になるよりも、むしろ、批判に対してディフェンスしながら鍵概念名と調査対象を維持することで、基本となる視点をずらさずに現地調査を続けられた

# メンバーの選択、成長

(1) これまで1人で調査していたが、共同調査の楽しさと意義を見出す(石山さん、中村さん)

- 現場で現地の研究者と。
- 現場で異分野の研究者と。

(2) 「伝染」した言葉を運用する

縄田さんの「妄想」という言葉を使うことでアイデアを気軽に表明できるように(石山さん)



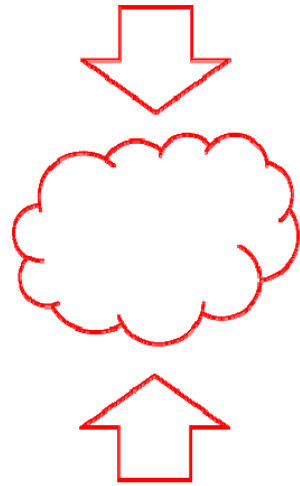
# メンバーの選択、成長(続き)

## (3) 提供された人脈が研究員にとっての「宝」となる

「縄田さんは地球研に来る前にすでにアラブ社会での人間関係をつくっていました。それを僕たちに提供してくれたんだと思います。...(中略)...研究員を信じて人間関係を託してくれたということだけでも、研究員の裁量だったり、研究員の自由度というのを、かなり高く設定してくれてたんだなと思います。」。(中村さん)

# 組織とガバナンス

トップダウン  
(でも、「さん」で呼ぶ)



研究員の  
高い  
裁量・自由度

縄田

- 段取りをつける
- いない
- つるまない(食事は別の場所)

1対1対応

市川

プロジェクト  
横断型

縄田さん  
より年長  
石山

プライベートな働きかけ  
⇒コミュニティ形成

中村

事務補佐員  
支援員

招へい外国人研究員

# 使用したツール、とその発見、発明

- ソフトなツールについて考えると...
  - 中村さんは、現地調査で、
  - 石山さんのインタビューのテクニックや
  - 縄田さんの人付き合いのテクニックを見られたことが面白かったそうである。
- 「縄田さんが、これはアラブ社会の調査する秘訣だよ...(中略)...大事なことは最後まで言っちゃダメだ。何か交渉して、何かお願いしたいときは最後までそのことは言わない。話が終わってまた今度会いましょうと握手するときに、ところで〇〇と本題を手短に切り出す、そういうふうやる」

このようなテクニックを見ることができた経験も、  
知の跳躍を支えていたかもしれない。



# プロジェクト運営でのケア

## (1) 年長の第一人者が一平卒としてリーダーを支える

- 「中身だって、かなりぼんやりしてましたよ。最初は。めちゃくちゃぼんやりしてたと思うんですけど、実はポスト石油時代っていう知恵をつけたのは、私なんです(笑)」(坂田さん)

## (2) 「さん」を通して年齢・立場の上下関係を消す

- アラブなりわいプロは、サブリーダーの方が年長である点が特徴的である。縄田さんは、石山さん、中村さんと3人でPRを始めた段階で、2人とも「さん」づけにし、3人の間にある年齢・立場の上下関係を消してしまった。

## (3) 跳躍に必要なストレス環境としての研究プロジェクト発表会とPEC

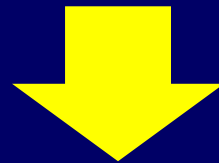
- ケアとは逆の性質を持つものだが、「跳躍するにはストレス環境下っていうのもないと、緩い感じだったらできない。」(縄田さん)。  
⇒ この役割を果たしたのが、研究プロジェクト発表会であり、PECであった。





# (1) 文化人類学者以外の視点でアラブなりわいプロの内部運営を評価することが課題

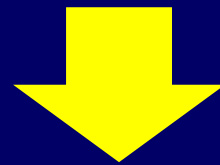
- アラブなりわいプロが、研究プロジェクト一般の観点からよく運営されたプロジェクトと評価され得るのか、それとも、文化人類学者にとってやりやすかった研究プロジェクトだったのかを判断することは、難しい。



- 異分野を専門とするプロジェクト研究員などからコメントを求めなどの対応をして、明らかにしていく必要がある。

## (2) 事務担当者の視点からの評価 が課題

- 「スケジュール管理については研究事務員の方がかなりしっかりやってくれました。相当苦労していたようでした。予算の執行とか。僕はプロジェクト運営みたいなことにはあまり意識なかったです。年度ごとにきちんと成果を出すという意識はなく、5年後に成果を出せば良いと考えていました。」(中村さん)



- 彼女たちから見て縄田さんやアラブなりわいプロがどのように見えていたのか。研究者とは違った視点での見解(よい点と改善すべき点)が見られると考えられる。

⇒ プロジェクトを総合評価するためには、  
事務担当者の視点からの評価が必要。

# 印象に残った点

- 他メンバーに対するネガティブな見解がほとんどない。現場の共有を志向している反面「我関せず」なところもあるから？
- 本の責任著者の第一著者がそのトピックのメインに扱った研究員になっていること。まだ若いリーダーで業績が必要なはずなのに、第二著者として落ち着いている点。
- 「いないリーダー」でもプロジェクトが回ったのは、アラブなりわいプロの体制とスタッフやプロジェクトメンバーの性質ゆえのところがあるのだろう。これらは全て分かち難い関係にあり、全体をセットとして見るべきなのではないか。